2000年度研究助成論文等要旨

15世紀イタリアの医師のまなざしと妊産婦の養生

—Michele Savonalora の論考から—

高　橋　友　子

本稿は、15世紀前半にイタリアのフェッラーラ侯の家系であるエステ家の宮廷医師として活躍し、またフィレンツェで宗教改革を試みた名高いドミニコ派修道士ジローラモの祖父であるミケーレ・サヴォナローラが妊産婦と産婆のために書いた論考『妊婦と7歳までのこどもの養生について』を取りあげつつ、当時の生殖に関する理論とそこに投影されているジェンダーを読み解くとともに、当時の医師と産婆の関係、妊産婦を取り巻く環境の再構成を試みたものである。

第1章では、ミケーレの経歴と『妊婦と7歳までのこどもの養生』の叙述の特徴について述べた。

第2章では、当時の医学理論に基づく妊娠のメカニズムを解説している同書の第一部を取りあげて、こどもをもつのにふさわしい年齢、受胎と胎児の生成、「石臼」の症状、胎児の性の見分け方と男女の産み分けの方法、そしてそこに投影されているジェンダーについて考察した。

第3章では、妊婦が妊娠期間中に経験する身体的トラブルとその養生法、および出産の介助法を扱っている同書の第二部から、妊婦のための食養生について一瞥した後、出産の介助と産婆へのアドヴァイス、そして同書の片鱗に垣間見られる著者の女性観について考察した。

結論部では、当時の妊娠・出産の場をめぐる状況と医師と産婆の関係について、本論で考察した内容から、いくつかの仮定的な指摘をおこなった。

附記：本稿は、2000年度神戸女学院大学女性学インスティチュート研究助成による研究成果として、『イタリア学会誌』第51号（イタリア学会、2002年３月刊行予定）に執筆した論文の要旨である。